

# 窪尼御前御返事

弘安三年五月三日 五九歳

ちまき わ たかな さけ 筒 た おわ 長 雨  
粽 五把・ 筍 十本・ 千日ひとつゝ 給び了んぬ。いつもの事に候へども、ながあめふ  
りてなつの日ながし。山はふかく、みちしげければ、ふみわくる人も候はぬに、ほとゝ  
ぎすにつけての御ひとこへありがたしありがたし。

さてはあつわらの事、こんどをもってをぼしめせ。さきもそら事なり。かうのとは  
人のいゝしにつけて、くはしくもたづねずして此の御房をながしける事あさましとをぼ  
して、ゆるさせ給ひてののちは、させるとがもなくては、いかんが又あだせらるべき。  
すへの人々の法華経を心にはあだめども、うへにそしらばいかんがとをもひて、事にか  
づけて人をあだむほどに、かへりてさきざきのそら事のあらわれ候ぞ。これはそらみ  
げうそと申す事はみぬさきよりすいして候。さどの国にてもそらみげうそを三度までつ  
くりて候ひしぞ。これにつけても上と国との御ためあはれなり。木のしたなるむしの木  
をくらひたうし、師子の中のむしの師子を食らひうしなふやうに、守殿の御をんにてす  
ぐる人々が、守殿の御威をかりて一切の人々ををどし、なやまし、わづらはし候うへ、上  
の仰せとて法華経を失ひて、国もやぶれ、主をも失って、返って各々が身をほろぼさん  
あさましさよ。

日蓮はいやしけれども、経は梵天・帝釈・日月・四天・天照太神・八幡大菩薩のまぼ  
らせ給ふ御経なれば、法華経のかたをあだむ人々は剣をのみ、火を手くにぎるなるべし。  
これにつけてもいよいよ御信用のまさらせ給ふ事、たうとく候ぞ、たうとく候ぞ。

五月三日

日 蓮 花 押

窪 尼 御 返 事